
カインによろしく！ 2

柿者ししまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カインによるしく！ 2

【Nコード】

N9299F

【作者名】

柿者ししまる

【あらすじ】

運命によって死を迎えた魂を霊界に運ぶ指名を持つ者死神。それを「バイト」という形でやっているカインと言う悪魔。この悪魔には他の悪魔と違い人に興味を持つと言うちょっと変わった趣味を持っている。そのカインが死を迎えんとする人間と接する中でなにを思うのか？変則ヒューマンファンタジー第2弾です。

天使と悪魔（プリンとカイン）（前書き）

「カインによろしく」シーズン2！
つてとこですかね（笑）

今回はとある事件が魔界で起きてしまいその舞台が人間界になってカインもとばっちりを受けてしまう。というお話です。
とばっちりの受け方がアレですが良かったら読んでくださいね。

天使と悪魔（プリンとカイン）

人の生き死にというのはどうやって決まるのか？

自ら命を落とすものもいれば、まるで思いがけず唐突な事故で死んでしまう事がある。

ところが今にも死にそうな環境から生還する事もあれば、直前まで近づいた死の足音に全力で逃げる自殺者もいる。

・・・戦争はこの際論外としよう。時代が進み生きる可能性が高くなってもそれでも人は勝手に死んでいく。

どれほど生きてくても環境がそうさせない。死ぬ必要がないのに心が死のうとする。理不尽で不条理で・・・不器用なもんだ。

それが人なんだろうけどな・・・さて、帰るか・・・

男の呟きは全て闇の中に溶けて消えた。下でうずくまる血溜まりの中の動かない男の体から闇を照らすにはあまりにも弱弱い光を放つ光を掌にのせては、腰の鞆に滑り込ませるように入れる。すぐさま蓋を閉めコートの内ポケットから手帳を取り出し、数ページめくりなにかを確認すると手帳をたたみ、リフトに乗ってるかのように体をゆつくりと上へと浮かべる。闇の世界、血溜まりから遠ざかる男は血溜まりを一瞥すると浮かぶ速さを上げる。

「なんだかな・・・」

男の口がなにかに溜まりかねて呟いた。その時闇の感じは変わっていた。澄んだ星空。冷たい風は今まで濁った闇の中にいた

男の空気を洗い流すように男を吹き過ぎていった。ビルの屋上に抜けた男は再び下を見る。血の赤すら見えない闇の底に、

「何かが悪かった訳じゃねえ・・・だがもつと上手に生きればよかったのにな・・・」

見えない誰かに呟きながら気付くと手は腰の鞆に乗せて慰めるよう

に撫でていた。ふう……。ため息を一つ、顔を上げた男だったが、
『……。？なんかくる！』

後頭部少し右になにかしらの感覚に気付いた男、殺伐としたものではないと判断した男は体をその方向に向けて何かを待つ。

飛ぶ鳥すら寝ているのだろう。闇の中、半月のなお欠けた光の中視認する事はできないが近づく何かを

理解した男は

「なんだよ……。お前らか……。」

表情はより柔らかくなりながら側まで来た彼らを迎えた。

「しばらくだな、カイン。」

彼らの中央に立つ一際大きな男が喋る。姿勢を崩さないカインという男。

喋った男の後ろが下を確認してはその男に何かを伝える。

「なるほど、仕事か……。精が出るじゃないか。昼もこの辺で確認してたぞ。」

照れくさそうに頭をかくカイン。

「なんだよ、気付いてたのか。それなら一声駆けてくれればいいのに。」

「ふつ。なにかに熱中してたみたいだしな。邪魔も悪いと思ったんでヘカーテ様に報告するに留めておいたよ。」

「!!!!!!なんだと!!!!?。」

「……。ぶつぶわあっはっははははは!。」

カインの予想通りのうるたえぶりに後ろの男たちは爆笑した。それには目もくれず大男に食って掛かるカイン。

「ちょ!じよ、冗談だろ!?なんで、なんでそんなこと」

「ヘカーテ様に言われてたんだよ。『カインがサボってたら報告しろ』とな。こちらは義務を果たしたまでだ。」

割り込んだ言葉を聞き終えると大男の喉笛にこめられていた腕の力がカインの姿勢と共に抜け落ちた。

「……。うつわ……。ま、また減給か……。?ヘタすりゃ」

「クビかもしれませんね〜!。」

大男の後ろの男がちゃちゃを入れてきた。突然カインの顔に怒りがこみ上げたかと思った瞬間。その男以外の全ての男達がカインを抑えにかかる。

「てつめええ!この半端馬野郎!お前がいうんじゃねええ!。」

「待て!カイン落ち着け!悪かった!悪かったから……。ほ、ほらお前も謝れ6号!。」

「あ、え?……。あれ?……。は、はい!すいません!カインさん!言い過ぎました!ごめんなさい!。」

ドタバタの悶着も散々あやまる6号と呼ばれた男の姿勢でまだ釈然としないカインであつたがひとまず距離を置いた。

「ふう……。まあ、減給はあるうが自業自得だろう。あいつの言葉も悪かつたがお前も今後気をつけることだ。」

「……。そりやそうだな……。悪かつたよ。あの言葉は俺も言いすぎた。謝る。許してくれ。」

頭を下げるカインを見ながら大男の後ろでめそめそしていた6号が「い、いえ、グス。自分も調子にグス乗ってしまつてすいまグスせんでしたグス。」

これでとりあえずの落着とすべきと見た大男が話題を変える。

「でも今は仕事が終わつたのだろう?これで堂々と遊べるんじゃないのか?。」

「あ、いや、これからこの魂を霊界に運んで、

はあ……。ヘカーテ様に報告、んで説教。報酬受け取り。で終わるだ。もうちよつとある。」

「そうか……。大変だな。」

この辺が引き時だな。そう考えたカインだつたが改めて彼らを見て何かの違和感に気付いた。

「あれ……。?なあ、ガミジン隊つて5人編成じゃなかつたつけ?多くないか?。」

「ん?ああ……。ちよつとな。こちらの事情だ。まあ、お前が冥

界に帰る頃には戻ってるよ。」

「そうか。お前らも大変そうだな。まあお互いがんばろうぜ。」

「ああ、それじゃまたな。カイン。またどこかで会おう。」「さよなら!」「さいなら。」「本当にすいませんでした!」

彼らがそれぞれカインに挨拶する。それを見ながらカインの体は再び浮かび上がりながら景色に溶けるように消えていった。

ガミジン。墮天使に貶められながらもそれでも天界に尽くす悪魔たちで主には人間の世界の取締りをしている。

言わば魔界の警察のような存在である。半人半馬で単独ではなく主に複数で行動する。それにはある理由があるが、

それは今後明らかになるだろう。ともあれ人間の世界で動くということでちよくちよくカインという男とは面識を持っている。

「・・・さて、道草をしたな。脱走者はもう少し西のようだ。他の隊も駆けつけている。これ以上へたに被害が出ると面倒なことになり・・・」

ガミジンの大男が口を止める。

「隊長。どうしました?・・・まさか・・・。」

「・・・ああ、そのまさかだ・・・。やれやれ・・・ああ、心配するな、カインと会った事が原因じゃない。」

それ以前に事態がそれ以上だった。ということだ。」

隊長はため息混じりに答えた。

「さて、まず現場に行く事が優先だ!総員続け!。」

隊長の号令に隊員たちは気持ちを入れ替えるように前足を蹴り上げる。闇に吹きぬける風すら貫くような速さでその一団は有明月を目指すように空を駆けていった。

彼らのいたビルの谷の闇間には複数の赤色灯の明滅まぶしく闇の中で行われた殺人事件の現場捜査が始められていた。しかしそれが自殺とわかるのはすぐのことであれ、それはこれから

始まる物語には・・・さして関係ない話である。

自殺者の魂を運ぶカインの物語はこれから始まる。

主任室にて

ザシュ！ズブズブズブ・・・ブシャツ！

「4号！くそ！よりによつてこんな事態とは・・・。」

真つ暗の中なのに不思議と一人一人が確認できる空間に大男の悲痛な叫びが響く。

大男と容姿が似ているが少し小振りの、それでも常人の倍はあろうかという体躯が四散して転げ落ちていった。

「さあ、どうするね？ガミジン諸君？逃げてもいいんだよ？君らには今なにもできないんだからふふっ。」

暗闇で確認できているのはガミジン達だけ、それも3人。動かなくなっている者は2つとなつて床に散らばっていた。

『隊長。ここは私が時間を稼ぎます！逃げてください！』

『いや、それには及ばん。もう手遅れだ・・・。』

暗闇に聞こえない会話をするガミジンの大男を含めた二人。その会話を聞いていたもう一人も大男の力を抜いた態度と言葉を聞いて悲痛に肩を落とした。

「ん？どうしたね？ボクの本性はすでに晒している。君らくらいならいくらでもどうにでもなるだろう？

ははは！さあ、ボクを仕留めたければ仕留めればいい！」

「下衆め・・・！今の貴様に手を出せる訳がなかるう。・・・やつてくれたな！」

「くくくつまあね。俺みたいな悪魔が外に出るにはこういうことくらいしかなくてね。でもそうそう出れるもんじゃない。

だから出た以上はとことん暴れたくてさ！もちろんやる事はやるけどね！」

「・・・すまん！」

意を決する断腸の言葉を叫んだ瞬間。ズババ！大男の構えた大槍が凄まじい回転を見せ、

その内にあつた2人のガミジン達の首を跳ね飛ばした。しかもそれだけでは終わらない。

そのままその振り込んだ槍を上空に投げ上げたのである。

「現状で我々に貴様に対処する術は持たん。この止まる体、食うなり何なり好きにすればいい。

だが得た情報は天界に収めたからな！貴様の下卑たわがままもここまでだ！・・・がふっ！」

まるでセリフを待っていたかのようなタイミングで投げ上げた槍が真っ直ぐ落ちてきて大男の喉を貫いた。

宙に浮いていたガミジン達の体はそのまま力を失い落下した。

「・・・ふん。自殺の許されない天界の者が投げ上げた槍ならセーフだ。とでも言いたかったのかね？ふふ。

しかしもう少し素早く殺しとけばよかったかな？そうすれば向こうに出す情報を絞れたかもしれないな。まあいいか！

遅かれ早かれどうせ戒厳令は免れないだろうし、それまでこいつらでも喰って力をつけて・・・それに、

こつちを終わらせれば・・・俺をどうこういつてられなくなる・・・。俺は人間になれるんだ！」

暗闇にはもう人影はない。人影はない、が、暗闇に不気味に光る瞳が浮かんだ。瞳はガミジンに下品な笑みを浮かべ、

そのまま向きを変えその後方にあるベッドで寝息を立てている大きな男のほうを見る。

「・・・だが用心はいるな。戒厳令を敷かれれば俺も閉じ込められてしまう。俺をコイツから引き離せる力を持つヤツも

きつとくるだろう・・・。いくらか手回しをしなければ・・・。」

そこまで呟くと瞳は眠るように閉じ、それと同時にゆっくりと暗闇が一箇所に集まるように小さくなっていった。

集まりながら床に落ちているガミジン達の死体はその闇に溶け込むように沈みながら消えてゆく。

暗闇の去ったあとにはガミジン達の血のりすら残ってはいない。

しかしその空間はその暗闇とさほど変わらないような暗さとしめじめとした湿っぽさを漂わせていた・・・。

人の部屋、学生なのだろう壁には同じアイドルのポスターが数枚貼られていた。カップ食品、お菓子の袋、

飲み残しのペットボトルなども散乱している。時計の針は十二時半、暗い部屋だが窓の隙間に差し込む光。寝ている男。

一つの集まっていた浮いている黒い塊はそれらを眺めるようにフワフワと揺れながら寝ている男に近づく。

「・・・なんにせよこの男の望みをさくさく叶えてやらないとな。まだこんな人間がいる・・・。

俺らがなくなる通りはないな！」

塊は男の頭部に重なると溶けるように中へと消えていった・・・。

「・・・ご苦労。」

一言呟いて汚いローブを纏ったガイコツは机の後ろを向く。巨大な机の上にポツンとアグラをかいているカイン。

カインの前に広げられた大きな紙の橋をカインが掴むとシウルシウルシウルという音はないがみるみる小さくなりカインの手にちょうどいいサイズになった。その神をジッと目を通してそのまま片手に持っていた手帳の隙間に畳みながらしまう。

「・・・こんなもんですかね？引かれすぎな気もするな。」

ゆっくりと立ち上がり伸びをしながら愚痴ってみた。

「・・・最後の仕事終わりが昨日の三時頃・・・。報告が今、人間界でなにしてた？」

「う・・・。」

ガミジンから報告を受けててな、明細の時間見てみな。時間は訂正しておいた。その虚偽捏造もマイナスといたからな。」

『！！そうだ！あいつら！』

カインのいる部屋は主任室。この部屋では部屋の支配者以外の心の声を音に出す事ができ、嘘をつけない空間である。

嘘でなくても思わず思ったことも出てしまう。

「・・・自業自得だ。これに懲りたらもうゲームというものは辞めるんだな。」

「・・・そうすね・・・。」

バツが悪そうに机から返事を返しながら飛び降りる。慣性のまま扉までの距離を進む。

「・・・そういえばそのガミジン達がやられたぞ。」

取っ手に手をかけていたカインが止まる。

「「やられた」っていうと？殺されたんですか？外で。」

「ああ・・・ついさっきのようだ。意識にそう伝えてきた。・・・お前と会ったガミジン達もそうだろう。」

「脱走者ですか？」

「・・・間違いないな。相当やられている・・・。戒厳令を敷くよ
うだ・・・。」

言葉の間は主任はリアルタイムで天界と交信しているらしくそのま
ま喋っているようだ。

「・・・あいつらやられたのか・・・。ざまあ見るだが脱走者って
どんなヤツだろ？ガミジン隊は俺でも手え焼くのに。」

「人伝の脱走者らしい。人質とられてその人質を引き離す術を持た
ないあいつらでは荷が重かったのだろう。」

ヘタをするとこちらにも鉢が回ってきそうだ。」

「へえ、そりゃ楽しみだな！」

「言っておくがお前には回さな・・・。」

「俺は仕事終わってますよ！他のヤツらは忙しいでしょうに。」

勝ち誇るように主任の言葉をさえぎって言うカイン。いつの間にか
ら机のど真ん中に立っていた。

「・・・時と場合だな・・・最悪の事態にはそうなる。」

椅子の背中越しだが肩を落として落胆する主任を見て笑うカイン。

「なる気がするな。最悪の事態！」

「なぜだ？天界とて事態収拾のため力を尽くすだろう。お前が出る

幕はない。」

少しカチンときたのか、主任が向き直る。

「だってそうじゃないと話が進まないでしょ？」

「・・・。」

と、とりあえず話は進んでゆく・・・。

だが事態はカインの予想すらはるかに上回る事態へと進んでゆく・・・。

脱走者

中空に浮かぶカイン。

そこは人間の世界。日本であらう。下に広がる町並みに田畑が見える。

町並みとはいうものの田畑の面積が多く田舎。と一目でわかる。

カインの下にはその田畑の真ん中に大きな敷地に三棟の建造物。楕円形に線が引かれた砂地の広場。

その中で体格ががっちりしているが年若の人間が幾人か、三十人位だろう、その建造物の周りを

あるルートに従って走っている。どうやら学校というところのようだ。

カインがその姿勢のまま下の学校を見ながら手帳を広げる。

「・・・針宇都映一・・・。高校生か・・・。ガキとはなく・・・。

」

愚痴、というより後ろめたさを秘めたため息交じりのぼやき。死の予定を受けたのは高校生。

ぼやきはそれが理由である。

人間には老若男女等しくどういう形であれ死を迎える。しかし、天寿を全うするか、唐突な事故か、

その結末は多岐に渡る。どういふ結末であれその死に本人、周りの人間がどう思ふかは

その時になって見なければ解からない。しかし、それはある程度、生きてみなければなおさら解からない。

生きる。ということはその環境によって左右されることが大きい。幸せの中で生きていても事故はおきる。

過酷な環境、状況でも生き残る術を身につけ、生き残ろうとすることとで活路を開く者もいる。

すなわちそれは生きる結果でもある。それはカインもわかっている

のだが、老若のことを考えると

「若くして死ぬより老いて死ぬほうがまだいい」とカインは思っているフシがある。

そのせいか若くして死を迎える予定者には若干テンションを下げる傾向があるため、このため息である。

「運命つても酷なもんだな……。まあ、それが運命か……。」

・ん?!」

しみりしていたカインの目前に突然濃い妖気の矢じりが恐ろしい速さで迫ってきた!

「!なるう!」

矢じりがカインの眉間まで数センチという瞬間魔力の帯びた左手のひらが妖気の光線の横つ面を

引っぱたく。と同時に顔をすばやく逆方向へ捻る。

軌道をずらされた光線は、矢じりがカインの顔すれすれをかすめカインを通り過ぎていった。

カインを通り過ぎ数メートルのあたりで煙のようになって消えた。

カインの視線は光線の飛んできた下の建造物。校舎だろう、その中に感じる光線と同じ妖気をにらむ。

「あいつだな? 脱走者つてのは……。不意打ちとはな……。いいケンカの売り方だ(笑)。」

しかもかなり重かった。ただの気まぐれで人間界に来れるようなヤツでできる矢じゃなかった。

そうとうエサ食ったか……。」

脱走者。それは人間界の魔界の者が無許可で来ることをさす。カインは死神という名分があるので

これには含まれない。

・・あえて説明しよう。魔界のもの(悪魔)は死神というような名文のない悪魔以外、

なにかしら理由のない悪魔は人間の世界においそれと出られないようになっている。

これは天界、魔界で定めた天魔法典で決められたことであり、それに準じた施行を施されている。

魔界の出口は一箇所と定め、空間を転移して移動する際にしても、その出口を

通過しなければならないようになっていし、その出口には門番があり、並大抵の悪魔では

太刀打ちできないようになってい。それ以上の悪魔は人間界そのものには大して興味を抱くことはなく、

興味を持つような悪魔はそれこそ封印されたりされている。

これでは悪魔は全く出られない。ように思われるが、実はそうではない。

この場合、魔界を出ようとすることはできないが、人間界から引つ張ろうとすることは・・・？

実はできる。のである。悪魔は人間の欲望の形である。その欲望を持つ人間が、異常な欲望の強さ、濃さ、

の影響か、魔界のその欲望の形とされる悪魔に伝わる事が、ごく稀にあるという。

その伝わった欲望は蜘蛛の糸のような細くもろい糸として悪魔の前に現れる。その糸を掴んでも

糸がそのまま千切れたり、その糸を見つけた門番が断ちにいたりする事が多いが、

ごくごく稀にその糸をそのままよじ登り人間の欲望にたどり着いてしまふ悪魔がいる。

それが脱走者である。脱走した悪魔はそのまま人間の欲望の意識に入り込み、その人間の欲望と重なり

その人間の欲望を満たす手助けをするのである。人間を介した脱走にはある程度条件があり、

悪魔は脱走したからといってそのまま人間界で形になるわけではない。意識を伝って出たわけなのだから

悪魔は意識の中にしかいられない。そのためその人間の意識の中で

まずその人間の意識を

飲み込まなければならぬ。意識の中であれば悪魔はその魔力を使うことはできる。（人間界ではさして

形にはできない。人間の意識に影響を与えたりする程度（催眠、洗脳））

人間は欲望を満足させてくれるものに依存する傾向がある。そのため悪魔はその人間を自分に

依存させ、そのままその人間の意識を魂ごと食らうことができるのである。

そして悪魔はその人間そのものとなり、そこから悪魔の本当の時間になる。ということである。

もつとも、その本当に時間に差し掛かる前になにかしらの手段でその悪魔を処断するのだが、

できるだけその悪魔に取り付かれた人間に被害を与えないようにしなければならぬことも

天魔法典には書いてある。人間界にそのまま出てきている悪魔ならガミジン達でもそのまま

倒し、魔界に強制送還することはできる。が、人間の欲望によつて出た悪魔はその人間の中にいるため

その人間から引き剥がす事ができなければ手が出せない。以前ガミジンがやられたのは

そういう理由からである。

意識の中であれば自分の魔力を引き出せるので悪魔はその魔力をある程度、

条件付で具現化することができる。その人間の意識がなにかしらの形で沈んでいる時、

（気絶、睡眠など）悪魔はその時に限り魔力を具現化することができる。ということなんだが、

その欲望を完全に満たすまでは人間の意識を優先させなければ、天魔法典の規約を破ることになり

消滅する恐れがあるのが、本能的に焼きついてのか、悪魔は慎重に動くため、

人間界そのものにはさして影響は見えない。しかし、悪魔は人間が意識を沈めている間、

悪魔らしく動き、手の届く範囲で自分を追ってきたガミジンや、そのほかの天使や、

近くをほっつき歩いてる悪魔などを殺して食らい。自分の糧とすることが出来る。

多く食らうことによって魔力を蓄え人間を取り込み終えた時により強大になることができる。のである。

まあ、そうなる前に倒されるか、そうなったらなっただ人間界に影響が出る前にボコるだけだな。

長くなっただ説明するとそんなトコだ。しかもよりによって今回の予定者の至近距離に脱走者が

いるとは・・・ご都合主義にも程があるってもんだな。あからさまに「俺がやれ」って

言われてるみたいだ・・・ま、タダじゃあやないけどな。

戒厳令が敷かれたことで封じ込めそのものは終わってる。あとは人間の意識に入り込める天使を使って

脱走者を出すだけだろうが、あの矢の強さから考えると・・・結構手遅れ感があるな・・・。

俺にお鉢が廻ってくるのももうそろそろってトコか。よし・・・日ごろいろいろ引かれてるからな。

思いつきりフっかけてやろう！んっふっふ・・・。

そんな感じで意地汚い笑みを浮かべながら皮算用しているカインの後方に、

カインに気づいた魔界の一団がカインとの距離を詰めてきていた。

脱走者（後書き）

今回は悪魔が人間界にくる方法などの説明がちょっと長いです。

天使の殺意

「その存在はその存在である限り存在が許されている」

天魔法典の前文の中にそう書かれている。

カインはもともと悪魔であり死神ではなかった。

もつとも、死神も悪魔に分類されているが、その定義はしっかりしていて死神は他になることも、

他の悪魔が死神になることはない。例外を除いて。

その例外がカインである。例外とは「特別扱い」と取れるがそのほとんどは「異質」である。

カインは死神以前の記憶がなく、記録も残されていない。いや、残ってはいても誰も

その記録を知ることとはできないのである。その記録を知るのはごく限られている魔界の上層部の

悪魔、天使、神々と言われているがそれも定かではない。誰もがその事柄そのものを禁忌とし、

触れることすらないからである。カイン本人もそのことを考えようとしても、まるでそうさせないように

意識がそれる。それにはカイン本人の性格も一つの一因かもしれないが、

何かしらの意志が働いているのかもしれない。ともあれここで言いたいのは、カインを含め、

カインの過去を知るものがほとんどいない。ということを知っておいてほしいと言うことです。

んじゃ本編へ……。

カインは人間界、とある国のとある町のとある学校の上空にたたずむ。つい先ほどその学校から

カインに向けて攻撃をしてきた悪魔の気配はもうない。悪魔は「消えた」わけではなく「隠れた」のを

カインは知っている。学校の上空にいるのはカインの今回担当する死の予定者がその学校にいるからである。

その予定者の「予定は」まだ一ヶ月以上先で、まだ死神の仕事をするには早すぎなのだがカインは

予定が決まるや、その人間を知ろうとすぐに人間界に降りてしまうのである。

実際これは死神の業務規約違反で注意を受けるのだが、「もう慣れた」とはカインの談。

上（主任）ももう言い飽きたので小額なれど減棒対象にすることで納めた。

カインは最初渋ったがガミガミ言われないのなら。と納得したという。

実際、別に問題を起こすようなことはなく、以前（第一話参照）のようにその人間を一目見たり、

合間合間で人間の世界で若干（？）遊ぶくらいである。その辺はカインも理解しており、

「この辺は大丈夫、これ以上はやバイ！」というボーダーができているという。

この日も何の気なしにカインはその学校のその予定者を覗いて帰るつもりだった。が、

攻撃を受けてちよつと熱くなっちゃったところへガミジンが近づいてきた。というのが今である。

「死神カインだな」

カインの背後から近づいてきた半人半馬の怪物の集団の中でも一回り大きい中心にいる男が声をかける。

カインは顔だけ振り返る。妙に怪訝な顔。というのもカインはなにかしらの事で気分を害していた。

ガミジン達からするとカインの仕草は急に呼び止められて不機嫌に振り返って睨んできた。

ような感じだった。カインの不機嫌の原因はガミジンの後ろから発せられているカインに対しての、

猛烈な殺気だった。カインとその殺気の間には大ガミジンが立ちふさがっている。バツの悪そうな顔で。

「カ、カイン、死神証を出してくれ」

「？」

死神証。カインの持っている手帳の事である。この手帳は予定者の記入だけでなく持っているということ

死神の証明にもなる。死神はその存在そのものが証明となるが、カインを使い出してから？か、

よほどの事ではないが他の悪魔にも頼んだりする時や、人間に頼む時（いつか書きます。変なバトル漫画

みたいにはなりません）に手帳を発行し、それを身分証として提示させるのである。

カインは暫定的であれ、死神を続けて数百年たっているらしく、もう手帳を提示する必要などないのだが、

どうやらそうさせたのは、その殺気の主のせいだろうとカインは思った。

「おう、見せてやる。顔見せろよ」

カインは懷から手帳を取り出しプラプラさせながら大ガミジンの後ろに言葉を投げるように言った。

「！！！！」

慌てたのはガミジン達だった。

『ばばバカ！そんな口きくなつて！』

周りのガミジン達はどよめき顔を蒼白させながら緊張したが、大ガミジンはビクつとはしたが、

顔をカインにのみ向けニラみながらテレパシーを送ってきた。カインもそれにテレパシーで返す。

ガミジンのテレパシー能力はその連带的なガミジン達同士の特有の能力だがガミジン達が意識して

他の者に発することで交信することができる。

『ん？お前の後ろのヤツなんなの？ずつつつと殺気向けられてるぞ？気配からすると天使か』

『そうだ。今回の戒厳令は知ってるな。そこでガミジン隊と天界の連絡を円滑にするために天使が

一隊にお一人つく事になった。そのお方だ』

『そのお方、めっちゃ俺を憎んでらっしゃるようだけど・・・気配からすると全く知らないヤツじゃね？』

「そうだろうな。人間界に降りたのは誕生して初めてと言っていた」

『はあ？ちよつと待て！ならなんでそんな見ず知らずのヤツから殺気ギョングヨンに向けられなきゃ

ならないんだ？』

そうこう会話（？）する間にもカインは手帳を大ガミジンに渡し、大ガミジンはその受け取った手を

後ろに回すようにして他のガミジンに渡しそのガミジンが丁寧にその天使に渡していた。

『知らん！だがちよつとの辛抱だ！さつさと手帳見せて形式的に済ませれば本人もすぐ納まるう。

そしたらすぐ我々はここを離れる！よく解からんがこの方はよほどお前が嫌いなようだ。

お前を狙った魔矢に気づいたのはこの方だがその矢以上にお前がいうことに怒ってたからな』

『だーからなんで知らん天使ごときに睨まれなきゃならないんだよ！』

「！！！！！！」

カインの天使への疑問、よほど熱くなっていたのか思っていただけだったのが声に出てしまっていたように周囲を一気に凍りつかせた。

「あ」

カインの声に天使の殺気が色を変える……。

「……なんだと……？天使ごとき……？ごときと言ったな？
悪魔の分際で」

『！？』

ピクつときたのはカインである。

「悪魔の分際？」そら天使はかなり悪魔を下に見てるフシがあるのは知っている。

「天使ごとき」と言ってしまったのは悪かったさ。でも最初に殺気ギョングヨンに向けてたのは、そっちだろ。カインはそう考えながらカインを包む妖気の色をその殺気に応えるように変える。

カインにもいろいろあった。ガミジン達とも最初のうちは同じ悪魔であろうとも、

人間界でする仕事の違い、存在の違いから幾度と衝突しそのことでも始末書を書いたことも

カインにはある。がそのうち打ち解け今があるように、最近のカインに「悪魔ごとき」とか、

「死神」であることを疑われるようなことはない。しかし、今になつて手帳を見せるだの、

殺気を向けられてただの、「悪魔ごとき」だのときてカインも熱くなっている。

『落ち着け！この場は穏便にだな』

『カインさん！ここは押さえて！』

『気持ちを静めてください！カインさん！』

大ガミジンだけでなく他のガミジン達もカインをなだめ始める。

少し呼吸が大きくなるカイン。ガミジンたちの言葉でその呼吸を深呼吸に変えたその時だった。

「ええーい！触るな悪魔があー！！」

ジュバア！！

大ガミジンの後ろから怒声とともに何かを振る音と何かが詰まった大きな袋を切ったような音が
ほぼ同時に聞こえてきた。

「！！」

大ガミジンは無念の表情で下唇を噛む。大ガミジンの左から一回り小さい、それでも普通の人間より大きな
ガミジンが表れてくる。力なく仰け反りながらカインを見てくる。

「！」

仰け反りが回転に変わるあたりで胴から下がとぎれて、下半身がそのまま下へ落ちていくのをカインは見た。

『カインさん、どうかここは俺に免じて・・・隊長の指示に・・・』
そのガミジンは視線が合った瞬間、そうカインにテレパシーを送り、意識が切れた。

ガミジンの体は落下しながらその体を空気に溶かしていった。妖気で固めて体を形成する魔界の存在は

体が形成できなくなると意識が瞬間的に別の場所に転送されるが、体は妖気の塊なので溶けやすい氷のように

その空間に溶け込んでいく。

カインの殺気は一気に消えた。大ガミジンや他の残りのガミジン達も一様に無念の表情を浮かべながらも

カインから殺気がなくなつたのを安心して落ち着いてきた。

「・・・おい」

カインは殺気を消したわけではなかった。

「今、なんで斬った・・・？」

カインは怒り方が2種類あつて、ふつつとこみ上げる時と、突発的に爆発する時とある。

先ほど悪口を言われて怒っていたのは突発的に怒り、早い段階で脅しにも似た巨大な妖気交じりの殺気を
かもし出すが、どちらかというときゃっかいなのは「ふつつと煮えてくるタイプ」で我慢(?)というより

まるで火山が徐々に噴火口へ近づいてくるような感じで静かになりそこからドカン！と

手がつけられなくなる。正直静かになる時はそのまま静まる時と怒った時と違いがわからないので

静かになつたくらいでは注意しなければならないのだがこの時にはその場の全てのガミジンたちが

ソレを忘れていた。

『！マズイ！カイン！落ち着け！怒るな！冷静に！冷静にだ！』

『あいつなんで斬った！？天使だからって勝手に悪魔斬つていいのか？部下だぞ！部下なんだろう！？』

すこしまだ理性があつたようでカインは会話に応じた。

『お前とケンカさせないように天使の体を止めようとしたんだ！あなたの方はお前のことをよく知らないんだ！』

お前怖いからな。しょうがない！あいつならタンタロスに逝っただけだ！よくあることだから！』

『よくあることって・・・あの天使なんて名前だ？』

テレパシーでの会話、その間でも、大ガミジンは必死にカインを抑えて説得している。

他のガミジン達はさっきの斬られたガミジン達の事で天使に近づかないように天使を説得している。

「（ゴニヨゴニヨ）様、どうかここはお静まりください。ここは人間の世界です。いかに（ゴニヨゴニヨ）

様でもこれ以上はお咎めを受けかねません」

『よく聞き取れないな・・・？わざとか？』

『ま、まあな。なんかお前に聞かれたくないんだと。だから私も言わん』

『ケチー』

カインは呆れて姿勢を戻した。もう殺気を出そうとするほど怒ってはいない。なんとか収まったようだ。

「そこまでいうならしょうがない。さがってやる」向こうも収まっ

たようだ。

「おい！いい加減に手帳かえせよ！バカ天使が」

「！！！！！！！！！！」

収まった矢先、カインは馬鹿にした口調で手帳の催促をした。

「天界もクソだな！いくら戒厳令とはいえこんな融通もきかん人間界のことや俺のことを知らん

バカ天使をよこすなんて（笑）ガミジン達が可哀想だぜ。お前も大変だな、隊長」

「カ、カイン・・・！」

全てカインの計算だった。啞然とするガミジンの中一人、大ガミジンがカインの狙いを理解した。

「お・・・お前のことなら知ってるさ（声が震えている）死神と偽り、

多くの人間や悪魔を食らってきた悪鬼・・・。」

「？」

「旧約聖書から創生されたごたいそうなワリにくだらんことだな・・・それでもなお死神の中に隠れて

悪行を繰り返す狡猾な悪魔め！私が来たのは貴様のような悪辣な外道を滅するためだ！！！」

「何を言ってるんだ？俺を知ってるのか・・・？まさか」

カインは少し迷った。この天使の言ってること。その中に理解できない部分がある。

旧約聖書の「アベルとカイン」という伝説から生まれた存在であるのはカインは理解している。

が死神をやる前、自分がどういう存在だったかを知らない。この天使の口ぶりは

まるでソレを知っているかのようだった。

ともあれ天使の憤怒は限界を楽に越えた。天使の妖気（天界では聖気と言う）は圧力を持ち、

周りのガミジンたちを跳ねのける。前に押し出される大ガミジンも

突然の圧力に耐え切れず、

つんのめってしまい危うくカインとアクシデントキスをかますところだったが、すんでカインがかわし

お互い事なきを得た。カインはここで天使をはじめて見ることになる。

「女の天使・・・」

天使の周りはまぶしいほどの光の聖気に包まれている。髪は肩まで伸びたブロンドでまぶしい聖気をより

輝かせるようになびいている。

・・・全裸だ。その体はギリシャ彫刻のように素晴らしいの一言では収まらないような

プロポーションをしている。しかしながら要所要所はまるでそうあるかのように羽衣がまとわりつき

うまく隠れている。絶対「見える」ことはなさそうだ。

手にした長柄の諸刃の槍。その片側には血糊がついている。さっきのガミジンのものだろう。

全体を見るとこれから悪魔に処断の刃を振るう勇敢な女天使の姿だが。その表情が異常なほど、

醜い憤怒を表し全ての美的要素を台無しにしている。

カインの描いた計算はこの構図だった。相手を限界まで怒らせ、向かってこさせれば

最悪、天使を殺しても「過剰防衛」で消滅だけはない。という考えである。

が、カインは先ほどの、天使のカインの死神以前を知っているかのような言葉を考えていた。

それでもカインの右手には既にいつもの腰ベルトから出した愛刀が攻撃型に伸びている。

戦闘経験、その力の差、カインの天使殺害はもう時間の問題であった。

『カイン！やめろ！やめるんだ！』

もうカインに誰の声も届かない。カインが足をにじり進ませる。その時だった。

「そこまでだお前ら」

太い声はその緊張した空間にだけ響いた。

天使の殺意（後書き）

さて、ガミジンを斬った後天使の武器に血糊が着いているくだりですが、

簡単に言つと「そういうもの」と言う感じで理解してください。

魔界の存在は妖気で体が形成されているので血が流れるのは不自然ですが、

人間型、動物型はその概念どおり血を流すこともあれば涙、汗、いろんな汁を出すことだってできます。ただ、それは物質的なものではない。

ということでご理解ください。そんな感じで続きます。

悪魔Ⅱ（？）Ⅱ天使

主任室。

大机の対面にある通常サイズのテーブル、その両サイドにソファー調の長いすが一列ずつ。

その奥に流れる血（？）の滝（カインー回目参照）。

その椅子にヘカーテ主任、カイン。対面、プリンシパリティ、大天使。と言う並びで座っている。

大天使が口を開く。

「あー・・・さて・・・今回はすまなかったな。カイン。ヘタしたら消滅刑かもしれないなかったぞ」

「そーですねー」

「貴様！ドミニオン様に対して・・・」

「いいから！お前座つてろ！・・・んん、っしかし、だ。なんにせよガミジンを問答無用で」

根拠なく斬ってしまったこちらに非があるにせよ、天使を手にかけてなくてよかったな！

ということにしよう！」

「そーですねー・・・なんていうk」

「そうしていくのが得策でしょうな。カインも納得したようです」
立ちかけたカインを強引に口を押さえながら座らせる主任。

この状態から三時間ほど前の話。

人間界、カインは複数のガミジン、そしてプリンシパリティと一悶着を起こしかけていた。

『カイン！やめとけ！天使に手をかけるな！』

『うるせー！あの脱走者だってもう何人も天使食ってるんだ！たいして違わねーよ』

『お前は死神だ！悪魔なんかじゃない！』

『・・・』

「この悪魔め！ほ、本性を表したな！」

『！！』

片手持ちの細身の剣のようなカインのナイフ。カインはガミジンと聞こえない会話をしながらも

無意識に構えていた。プリンシパリティはここでもようやくカインの内在する戦闘力を思い知ったのか

憤怒の中に少し警戒にも似たおびえを感じていた。

『こいつ・・・隙がまるでない・・・。飛び掛ってたら真つ二つにされてた気がする・・・。』

あ、悪魔怖い・・・で、でも』

カインの腰が沈む。プリンシパリティが来ない。そう判断したカインは踏みこんで一振りで

斬る気になっていた。

『カイン！やめろ！やめるんだ！』

今まさにカインの足に力が入りかけた瞬間！

「そこまでだお前ら」

突如としてその場が光に包まれる。その瞬間もう一人の天使が現れた。その天使はプリンシパリティ

以上に光に包まれ白金に光る鎧に包まれながら端正な顔立ちをした男だった。

位置はカインとプリンシパリティのちょうど真ん中。視線はカインを見ていた。

しかし、睨んでいるとかではなく、まるで友人のいさかいを仲裁するような眼差しだった。

「・・・ドミニオン・・・」

「は、ははあ！」

とっさの感想は共通してボーゼンとしたが現れた人物を把握した時

の感想は真つ二つだった。

「カイン、久しぶりだな！間に合ってよかったよ……。あんま冒險すんなよ、な！？」

カインはドミニオンと呼んだ人物の上に気配があるのに気づき気さくにしゃべる天使を軽く無視して

その上を見上げた。困り顔の黒ずくめのローブに大きな歯車のような輪を肩にかけた、翼こそないが

天使の持つ特有の妖気を放つ男がカインの視線を合わせた。

少し考えカインは推察した。

要するに戒厳令下の人間界でトラブルがあつて（この事態のこと）それを収拾しようとおれ

（上の天使）が来たけど自分じゃ無理と判断してドミニオン（大天使）を呼んだ。ってとこか。

カインの目が半ば呆れるように天使を見る。苦笑いして顔をそらす天使。

カインの視線を目で追ったプリンシパリティも上を見て

「ソロネ様！なぜここへ！？」

プリンシパリティにも呼ばれそちらにも目を向けたソロネ。

「あー……。話せば長いんだよ……。はあ」

ため息をついて少し高度を下げるソロネはゆっくりとドミニオンの傍らに降りた。

プリンシパリティは対面したソロネに礼をして跪く姿勢をとる。

「カイン！聞いてくれよ！ね！」

「うお！ドミニオン！あんま近寄るな！お前の聖気はキツイんだ！肌に痛いからやめろ！」

わかった！わかったから！」

無視されてたドミニオンがふざけるようにカインに擦り寄る。神々しいほどの光を放つ天使が

一匹の悪魔に擦り寄っているのが異常な光景に映っているプリンシパリティ。

だがカインの言葉を聞いてなにかしらの攻撃だ。と思い変な納得をする。

「ま、まあ俺も熱くなりすぎだった。殺気を抑えられなかったのも事実だ。でも、一番の原因はだな」

「ああ、解かつてるよ。だから来たんだ。・・・13番・・・」

カインの声に少し距離を置きながらばつが悪そうに苦笑いで答えたドミニオンが、少し間を置いて

振り返りながらプリンシパリティを番号で呼んだ。

「はい！」

立ち上がり姿勢をただし返事をするプリンシパリティ。

「13番？」

カインは天使たちの間でなにかしら会話が始まったことで取り残された気持ちになったが

同じ取り残され組のガミジン達に会話をするように思考を向けた。

「ああ、天使たちの連帯的天使間ではそれぞれの方を番号で呼ぶんだ。」

我々にはたいがい、一人で来られるので名前を用いるがな。

あの方はプリンシパリティの中で13番目ということらしい。

もつとも別に13人しかいないわけでなく、その地域での番号らしい」

「いや、まあそれは知ってるが普通キリスト教圏の天使の間だったら12番までじゃないか？」

「ああ、それは我々も考えたが、まあ天界の見解だからな」

「・・・ふん」

どう考えても暇つぶしの世間話のように会話をしていたカインは視線を天使たちに戻す。

ソロネがこつちを見ている。ソロネのあごが上を向きまるで「あつちいけ」という合図を送ってきた。

直後「はっ！」という威勢のいい声を発しガミジン達が任務に戻るのか下、

（カインに向かつて魔力の矢が飛んできた位置）に降りていった。
「あいつらは通常通り脱走者の監視に向かわせたよ。悪かったな、カイン」

ゆっくり近づいてくる天使はソロネ。

「ああ、久しいな、別にお前に止められてもよかったのに」

「はは・・・ちょっと怖かったんだ。人間界で無茶はしないだろうと思っただけ」

珍しくお前のガチで怒ったトコ見たからな」

「まあな。あれはないわ・・・あの天使なんなんだ？」

「ああ・・・あいつは・・・」

「さて！カイン！」

ソロネがカインにプリンシパリティのことを説明しようとした瞬間、カインを呼ぶ大声が聞こえた。

「久々に会えて嬉しいんだけどさ！とりあえずペルセフォネ様のところに行こうか！

向こうも呼んでるみたいだよ！？」

「いてえ！いででで！わかったから肩をつかむなって！逃げないから！逃げないから！」

「ソロネはあのガミジンを監督してやってくれ。まあ悪く扱わないようにな」

「心得ました。それでは失礼します」

礼儀正しく礼をするとソロネはそのまま解けるように消えていった。おそろくガミジンたちの下に行っただろう。

「13番もわかってるね？」

「・・・はい」

カインから離れながら無邪気にしゃべるドミニオン。しかしなにかしら薄ら寒い感じを

カインはその言葉に受けた。

『天使って時々悪魔以上に非常なことをする時あるんだよね・・・そ

の時に似てた。

あの天使なにか言われてたが終始半泣きだったもんな。俺に顔を見られないように

今は顔を伏せてるが・・・あれ泣いてるだろ。何を言っただんたろ？わかってるって

・・・なんだ？」

そしてその場から全ての天使悪魔たちは消えた。

・・・場所を変えて・・・今である。

ドミニオンの言ったペルセフォネ様。というのはこの主任のこと。話すと長いので

ちよろつとした説明で済みますがペルセフォネとヘカーテは同一人物である。以上！

「回想と説明は終わったようだな。本題に入ろうか」

主任の部屋は特別な部屋で主任以外の心に思ったことは全て声となつて聞こえてしまう。

そのせいで回想も説明も聞こえていたようだ。

「おい！もういい！」

「これもでしたね・・・」

「まあそんな感じだな。ともあれ今回はうちのプリンシパリティがご迷惑をおかけしまして、

申し訳ございません！」

ドミニオンがテーブルに頭を下げる。悪魔に大天使が頭を下げている。

プリンシパリティは理解できなかった。が、ここは下げるしかない。しかし

長椅子にふんぞり返っているカインを見るとふつふつとプリンシパ

リティに怒りがこみ上げる。

しかしドミニオンになかば強引に頭を押さえられ頭を下げるプリンシパリティ。

「そうそう、はじめからそうしてればいいんだよ！（ドカツ！）
いつてっ」

ソレを見て高笑いするカインだったがカインの後頭部を骨の拳が襲う。

「調子に乗るな。なによりお前・・・予定者はまだ監視期間外だったはずだろ？」

外（人間界）でなにしてたんだ？」

「う・・・」

その言葉に顔を上げるプリンシパリティ。

「ドミニオン、こちらこそこのバカが勝手に業務違反をしただけ、それを罰しようとしたその天使

には奨励すらしたいほどだ。こちらこそすまなかった」

深々と頭を下げる主任。カインも下げようとするがプリンシパリティを見るカイン。

天使の顔は「お前こそやっぱり悪いことしてるんじゃないか！」と書いてるように感じ、

頭を下げられないカイン。主任もまたカインの頭を抑え・・・

ガシャーン！

テーブルに叩きつけた。

「いつてえええ！おかしい！おかしいだろ！それ！普通に押さえれば頭くらい下げるよ！」

流石にびっくりしているプリンシパリティ。双方の緊張もどうにか解けたようだ。

ちよつとの間。頭をぶつけたカインの碎けた部分のテーブルは既に直っている。

「・・・さて、今回の件、非はどうあれ双方にある。カインは本来の業務期間以外の人間界出現」

「こちらは13番の理不尽なガミジン隊士殺害。あ、あのガミジンは特例として急遽蘇生させて

元の部隊に配属させました」

「へーそうか」

カインのその安心した表情に微笑むドミニオン。

『・・・・？・・・・』

プリンシパリティはそのカインの悪意のない顔が不思議でしようがないといった表情で見つめていた。

その表情に気づいているのはカイン以外の二人だけだったが。

主任は立ち上がって椅子を回り込み、後ろから何かを取り出しながらしゃべる。

「今回、カインの予定者のエリアに奇しくも脱走者がいる。と言う事態。

コレがどういうことか解かるな？カイン」

「ええ。やっぱお鉢が来たんでしょ？」

「嬉しそうだねーカイン」

「ああ！、いや、はい！そうですよ。ちょっとした小遣い稼ぎですから！戒厳令なんか敷いても

世間知らずの役立たずに任せてたらできる仕事もできやしない」

「！貴様！それはだれのことを言ってるんだ！？」

「あれ？解かりやすく例えたつもりなんだけど？そんなに鈍いのか？お前？」

「き、貴様・・・！」

ズドン！

およそ刃物が振り下ろされたとは思えない音を立ててカインの傍らにカインの身長ほどの刃を持った

大鎌が突き刺さっている。カインの服の肩は削れている。冷や汗が一気に吹き出るカイン。

表情はプリンシパリティを挑発した瞬間で凍っている。

挑発に乗りかけたプリンシパリティも自分の視線にいきなり大鎌が

現れて声も出ないまま

冷や汗を噴出していた。

「んんゝ！カイン、確かに今回戒厳令を敷くまでに至った事態になつてしまったのは天界としては

甚だ恥ずべき事態だが、それもまた運命かもしれない。今は一刻も早く脱走者を捕殺することに

全力を向けたい。プリンシパリティはその使命に純粹すぎた上にカインのことを知らず、

カインの妖気をそのまま悪魔と判断して襲い掛かった。という経緯になる。

実際カインは業務以外での人間界への現出。そう思われてもしょうがあるまい？」

「・・・」

反論できず大鎌の抜かれた長椅子に座りなおすカイン。修復はされていない。

「そこで・・・カイン、プリンシパリティ。目を瞑れ」

「え？」「は？」

「いいから！ほら13番！」

ドミニオンに促されると断れないプリンシパリティはさっきの挑発を思い出して一度カインを睨む。

その視線に気づきカインもプリンシパリティを見るが

ゴツツ！

殴られたカインを見て目を瞑るプリンシパリティ。

「早く瞑れ。それとも目をくりぬこうか？」

「はいはい！」と目を瞑るカイン。

ここから二人の心の声

『ん？腕を持たれた？なにしてんだ？あ、なんか掴まれた？いや、縛られ・・・え？』

少しほくそえんだドミニオンが声をかける。

「よし！二人とも開けていいぞ」

「!!」

「! なんじゃこりゃ ああああああああ!!」

「おそらくこれが、今回一番最良な方法だ」

「これは我々がお前たち二人の今後の学習のためにと考えた方法だ
! 感謝しろよ! 13番! カイン!」

声が出ないプリンシパリティ・・・絶叫の後ボーゼンとするカイン。
脱走した悪魔はどうなるのか? カインは死神の業務がこなせるのか?
その答えは二人の腕に縛られた『何か』にある。のかもしれない。
。。。

つづく

悪魔Ⅱ（？）Ⅱ天使（後書き）

とりあえず続きます。

人間の話になりはするんですがなんか悪魔しか出てきませんね・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9299f/>

カインによろしく！ 2

2010年11月13日11時24分発行